

自然

ヤマメちゃん安らかに

日本の秘境と言ってもよい山間^{やまあい}に、私が定宿^{じょうやど}として居るお氣に入りの温泉宿がある。私の住まいからは、氣の向いた時にちよいと出かけようという近い距離ではない。

三十年以上も前、友人の誘いにのって、片道四時間半も掛けて舗装もまだらな道を車で駆けに駆け、辿りついた宿であった。とくに驚いたのは目的地近くなつての隧道^{すいどう}の長さであつた。友人は「この長さは二十一キロで日本では二番目の長さだからね。今日の狙いはサクラマスのおおものだ」^{さくらます}（桜鱒はヤマメの陸封されたものだが、人口のダムでも育つ）と云つたが、夜道の闇とは違って前方も後方も見えない四面の暗黒は、まるで地底の国に向かつて進むような錯覚を覚えさせられた。勿論、この道は温泉宿への専用道路ではなく、かつてのダム工事用の通路を便宜的に利用しているのだと聞いてはいたが、隧道の途中に信号機まであるのにはただ驚くばかりであつた。我々の目的は実は魚釣りだつた。趣味が高じるとこの隧道のように前後が見えなくなるとよく云うが、この釣り場は私の想像外の世界にあつたのである。

忙しいほどの大釣りは、周りの絵ハガキのような景観とあいまっ

て、私を魅了したことは言うまでもない。美しいものの素晴らしいものは、他の人にも分けてやりたいと思うのは人情である。七、八年ほど前から末娘の婿さんを誘って出かけるのが年中行事となった。初孫から三人目まで、全員がこの地の残雪遊びを経験することになったのである。宿舎は十人も泊まれるログハウスで、少し離れた処にある母屋は瀟洒しょうしゃな建物で宿主とは顔馴染みである。

奥さんは立ち居振る舞いの上品な人で、訛のない人であった。もつとも、越後は関東圏だから言葉は共通語に近い。同じ会津内でも会津弁と檜枝岐の言葉は全く違う。檜枝岐は江戸時代まで幕府の天領であり、その名残が今日まで言葉として残っているのである。私わたくしがそのことを褒め言葉で話題にすると、奥さんは自分の身の上話気軽に始めた。「私は生まれも育ちも東京であるが、大学へ通っていたとき先輩である今のご主人に出会った」という。ご主人はここ湯の谷の生まれで故郷を是非見せたいと初夏の頃私をここに連れて来た。澄んだ空の下、残雪と若葉のコントラスト、清らかな溪流の流れ込む湖、どれもこれも美しかった。こんな世界で一生過ごしたい。と私は思わず軽率にも口に出してしまった。この景観がご主人の計画だったと知ったのは結婚して最初の冬だった。十月下旬から降り始

める雪は四メートルにもなり、遅い春は土を見るまでに五月まで待たなければならなかった。主人の家は湖畔で小さな温泉旅館を営んでいたが、冬には客はなく、雪掻きが日課だった。と歯切れよく屈託無く話してくれた。この話は辻褄が合つじつまっていて私を十分に納得させた。

ところがある年、ご主人が一人で蕎麦を打っているとき、風波が強く私が釣りにならないでいるとき、遠まわしにそのことに触れてみると、ご主人は顔色も変えずに「やられましたな！その話は作り話ですよ」という。さらに、「私も家内もこの土地の生まれで、家内の父はダムの出来る前はこの只見川の職漁師でした」と予想もしていないことを云った。私の頭の中は混乱し、どちらの言い分が正しいのか分からなくなった。

ご主人の話が正しいとして、一つだけ考えられることは、奥さんは結婚する前、街場の旅館などでお客さまの扱いを身につけていたのかも知れない。だから言葉も立ち居振る舞いも上品で客扱いが上手なのだ。解らないのは、どうして作り話など考え出したのかということである。推理するに、奥さんは時に街場が恋しくなり、誰かに架空の話をすることで自分なりの人生の理想を心の中に描いてい

たのではないのか。それほどにこの地は桃源郷でもあり、過酷な土地でもあったのかも知れない。と考えるしかない。

この宿にはもう一人 いや、もう一匹懐かしい生きものがいた。ラブラドル犬である。年に一度の邂逅にも忘れることなく我々の顔を見るや、面相を崩し、身体全部で喜びを表現する。初対面から十数年経つから、歳は老齢に近いと思われた。雌の犬なので三人の孫娘と気が合ったのかも知れない。考えて見れば、この地には釣り天狗の強欲な大人しかやって来ない。彼女にしては退屈な客ばかりのはずである。そこに雪遊びを目的とする人間たちが現れ、鎖を解かれ自由の世界を満喫できるのだから、しっぽをちぎれるほど振つても歓迎は止まない。織姫の一年ぶりの逢瀬にも似て我々を忘れずに待っているのである。その彼女が、平成二十二年の初夏には姿を見せなかった。前年の暮れ、老衰で他界したとのことであった。孫たちは、今年は何かが欠けていると感じながらも、それが何であるかが分らず遊びの空白を探しあぐねている。雌犬の彼女がいつ何処で生まれ、どんな生活ぶりをしていたのか私には知る由もない。

ただ想像できたことは、彼女の魂は長い長い隧道を抜け、越後山脈の映える西空の遥か向こうに見えはずの、浄土の世界に行ったに

違いない。と奥さんの作り話と重ね合わせてかつてに空想を広げた。

彼女の名前は奇しくも「ヤマメちゃん」と云ったのであった。